

特用林産物の生産動向

平成二〇年の特用林産物の生産動向がとりまとめられました。きのこ類は、「乾しいたけ」、「生しいたけ」が前年より増加し、「なめこ」、「えのきたけ」がほぼ前年水準並み、「ぶなしめじ」、「エリンギ」などは小幅ながら前年の生産量を下回りました。人工栽培が確立されていない「まつたけ」は、気象条件に恵まれたことから前年比四割の増加となりました。輸出国における国内需要の増加等の要因もありますが、「健康・安全」に対する消費者意識の高まりを受け、国産品に対するニーズが高まる結果となっています。

林業産出額の半分を占める 特用林産

特用林産物とは、食用とされるきのこ類や樹の実、山菜類等のほか、非食用である木炭、竹材、うるし等、森林原野を起源とする生産物のうち一般用材を除いたものの総称です。現在、施設栽培が主体となっている「えのきたけ」や「ぶなしめじ」なども含んでいます。そして、これら特用林産物の総生産額は林業産出額のほぼ半分（平成一九年四九％）を占めており、木材生産とともに森

林・林産業の振興にとって重要な位置を占め、地域経済の振興や就業の場の確保といった面でも大きな役割を果たしています。

「食の安全」から 国産のニーズ上昇

平成二〇年の特用林産物の需給動向は、消費者が一段と「食の安全」を重視していることを物語るものとなりました。「生しいたけ」は二年連続で輸入量が半減したほか、「乾しいたけ」や「たけのこ」も輸入量は前年より一三％減少しています。

「木炭・竹炭等」が前年を三％上回る輸入実績となっているのに比較すると、食べ物に関しては、消費者の「食の安全」に対する関心がより高まっていることを裏付けるものとなっています。

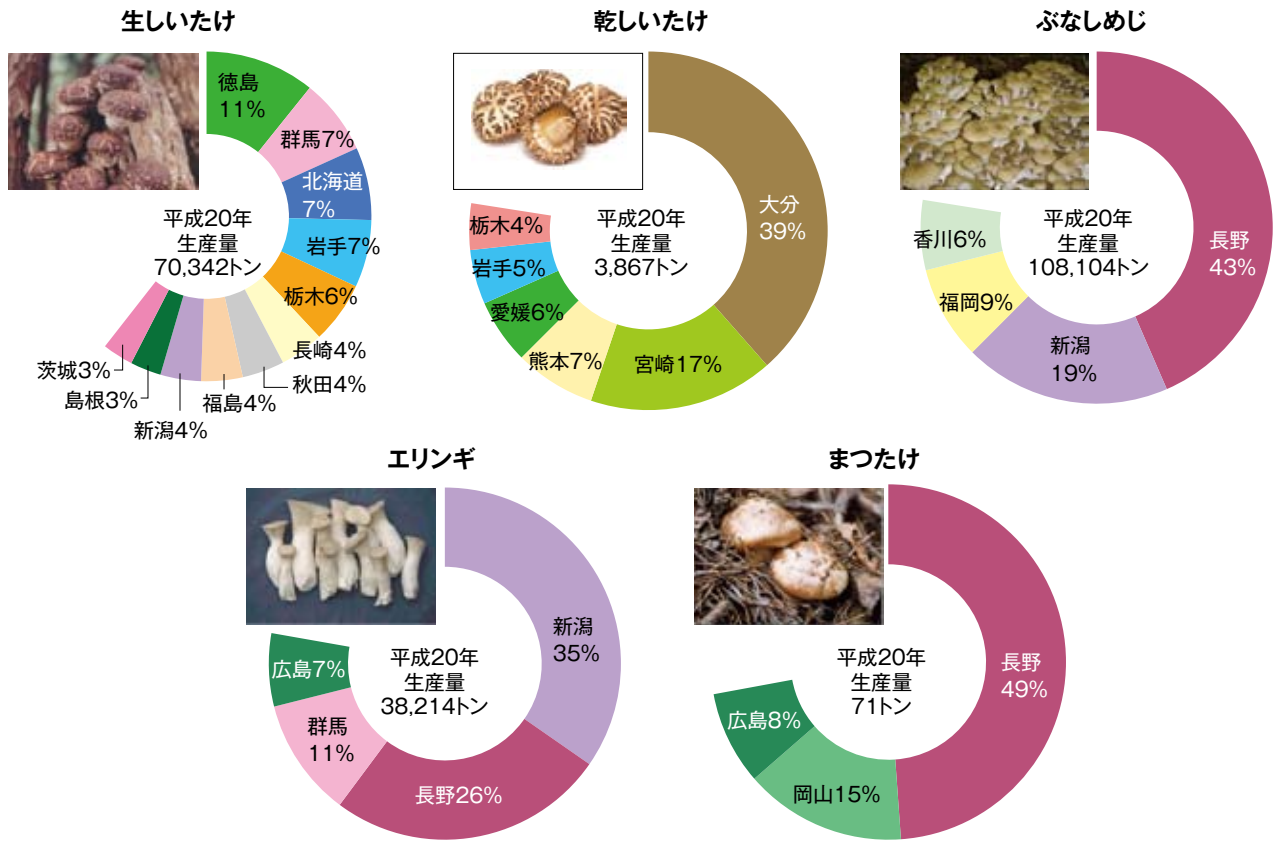
一方、国内生産の「生しいたけ」は五％増、「乾しいたけ」は九％増といずれも伸びています。しかしながら、輸入量の減少分をカバーするまでには至っていません。「食の安全」に対するニーズが高まり、食用品に係る国産の市場規模は確実に大きくなっていますが、きのこ類においてその潜在需要を実際のものとする

るためには、消費者の求める商品の開発や供給・流通体制の整備等に対するより一層の取組が期待されると言えそうです。

秋の味覚の代表格である「まつたけ」は、平成二〇年は気象条件にも恵まれたことから国内生産は七一％となりました。輸入は一、三二九トで前年比一五％の減少となっているものの、圧倒的に輸入が多いという状況には変わりないようです。

また、きのこ類以外の食用品としては、「たけのこ」が前年比三四％増、「くり」が前年比一〇％増となりました。「たけのこ」は主な生産地が

主なきのご類の生産状況(上位生産道県)



また、里山林の放置等により管理されていない竹林が増加している竹については、フローリングや舗装資材、不織布への利用や竹材内の物質を抽出した抗菌剤としての活用など色々な形で新規用途開発が進んでおり、今後その成果による需要の増加が期待されています。

非食用品に関しては、別表にまとめたように、総じて景気の落ち込み、代替材の普及等を背景に「うるし」以外の国内生産量は前年を一割弱下回る結果となりました。しかしながら、木炭についてみると、海外からの輸入は、昨年、三割伸びています。このため、木炭業界では、消費者に分かりやすい新たな木炭の規格づくりなど、国内産木炭と輸入木炭との差別化に取り組んでいます。

非食用・課題は新規需要の開拓

表年だったこと等から豊作となりましたが、一方で産地偽装問題などもあり、「たけのこ」を始めとする特用林産物に対する消費者の信頼確保が求められています。

非食用の主な特用林産物の生産動向

区分	生産量	対前年増減率 (%)	生産額 (億円)	対前年増減率 (%)	主な生産道県
うるし	1,586 kg	15	1	36	岩手、茨城、栃木
竹材	1,043トン	-9	9	-13	鹿児島、熊本、大分、山口、福岡
桐材	1,284トン	-9	1	-9	福島、秋田、群馬、山形
木炭	26,740トン	-7	34	-10	岩手、北海道、島根、岐阜、福島
竹炭	1,150トン	-9	9	-15	福岡、熊本、山口、鹿児島、京都